

お茶の水女子大学中国文学会三十周年記念大会 記念講演

喬木に遷れ

近藤光男

近藤でございます。

私今日は、「喬木に遷れ」と言う演題を思いました。これを思いついたいわれからお話ししたいと思います。今日お手元に渡りました学会報三十周年記念号に藤山・菅原両氏による学会創設前後を回顧する文章がみえます。それによりますと、いまの学会報に先立つて若干そうした研究発表をする機会があったこと、「中国文学研究會報」という雑誌がまずあったと、次いで「嚶鳴」という雑誌が出て、……それからこれは私が着任した前の年から四号まで出たのが「有腫」という、……その「嚶鳴」の方ですが、これは今回初めて聞きましたんですが、中文科初代の主任教授でいらした網先生が名づけられたとのこと。まことに嘉よき名なを錫たまわつたものと思います。

それは『詩經』の「小雅」の「伐木」の詩からであります。今日講演の資料としてお配りしたプリントはお一人四枚であります。その一枚目に収めましたのは、その下に書物の奥付を印刷致しました。私にとって大切な先生の一人になりますが、目加田誠さん、目加田誠先生の本、『詩經』の翻訳から取って参りました。で、その刊行年月日を見ていただきたいんですが、昭和十八年です。その昭和十八年の十二月に、私共はそれに先だつ数ヶ月前の東条演説で、所謂学徒応召を致しました。そもそもそれ以来戦後にかけて、中国古典の翻訳と言えるも

のは、この目加田訳の『詩経』、それから京都の東方文化研究所で行われておりました「尚書正義」、吉川幸次郎先生その他の研究所の方たちが集まっていたの会読によって、これは「尚書正義」を校勘するという大きなお仕事の、むしろ副産物として翻訳が行われていました。それが完結致しましたのが、岩波から『尚書正義』四冊として出たのです。それから、倉石武四郎先生の『論語』の口語訳と……で、戦中戦後にかけて中国古典の翻訳と言えるものは、その三つ……『詩経』と、『尚書正義』と、それから『論語』と、この三つでございました。その一つ……敢えてその一つである目加田訳で「小雅・伐木」の詩をそこにお目にかけておきました。「木を伐ること^き 丁々^{たうたう}、鳥鳴くこと^{あうあう} 嚶々^{ふか}、幽き谷より、喬き木に遷る^{うつ}」と。これを私は断章取義で、今日の講演の題と致しました。これは藤山さんから伺ったんですが、その雑誌が藤山さんのお手元にも残っていないというか、研究室に残して去ったとおっしゃっていますので、もつと早くからお願ひして、今日出して頂いておけばよかったと思います。「有腫」は、頼さんから、『世説新語』に基づくと聞いたことを今も覚えております。当年の学生諸君の編集にかかるもので、ちょうど私着任した翌年に第二号が、次いで三号四号が出まして、私も論文に近いものをお渡ししております。その二つの雑誌と、それから菅原さんあたりがお世話くださったって、何とか長く続きました「五土会」と。これやはり佐藤教授の発想であったことを今も覚えていますが、第五土曜日というのは毎月はないから、負担が重くなくてよからうということで、第五土曜日の会なので「五土会」と。で、これらが奇しくも学会の準備の会となったと私は理解しております。藤山さんと菅原さんとの、記念号の巻頭の文章は、その辺のこと、いろんな配慮があるわけで、あまり詳しく書いておられません、それなりに楽しかったと。ただ、ある時は発表する方お一人と、それから近藤、佐藤の両教授のみで、三人でやったこともございます。会というのはそれではないですね。まあそういうこともあることを頭から覚悟しておればいいんで、それでこそ長続きもするわけだ

が、そういう思い出につながります。

なお断章取義とは、「章ヲ断ジテ義ヲ取ル」……『詩経』の詩に見える何か適当な一章を取ってきて、その中に思いを込めるというようなことで、孔子の弟子が先生から何か言われて、それは『詩経』にこれこれというのに当たりますね、というような反応を示すと、孔子様大変お喜びになる、というのは、『論語』の中に二カ所ばかり見えること、ご存じの通りです。それで私なりに、この学会もそろそろ「五土会」などから、まず「嚶々」の鳴き声を上げた時期から、今や「喬木に遷る」時期であろうと……。『嚶鳴』とは目加田訳で「友呼び誘ふ聲なれや」とありますように、『詩経』を読んでいると、友を呼び誘いながら深い谷から出て高い木に移ろうということだとわかる……これはまた古典文学のおもしろさだと思います。それで、今日の演題を思いついたわけです。

で、やっと一枚目のプリントの真ん中以後に移ります。

どちらを先にするとおもしろいでしょうかね、着任した年の思い出からにしましょう。だからそれはこの学会ができる七、八年前に当たりますが、入学式が済んだ後、新入生と父兄とに研究室において頂いて教官と対面をするという、一種の対面式が毎年……今はもうできなくなっただけでしょうね……学科の編成が変わったように伺います……。今日おいでの方はみな割と覚えておられますか、対面式がありました。頼さんが僕に「近藤さん出てくださいよ」とおっしゃるので、「いや、私まだ辞令もらってないから出るわけにいかん」と言っただけですけれど。頼さんが「もう明日から学生諸君と接してもらう人だから、辞令、辞令と言わないで」という……まあこれは私も折れて、出席したの……そうしたら頼さんが、「その端の方から一人ずつ、どうして本学科を受験したかをお話ししてください」とおっしゃったんですね。すると一番最初の方が、「中国語を話せるようになって来ましたが」とおっしゃった。そうするとこれが先駆けをなしたためかどうか、十人が十人、あと次々と、「私も中国

語、「私も中国語」と続いて終わったんです。で、私は、つい「あのう、皆さん今お話しのようにですと、受ける大学を間違えております」とやった。(笑)……で、「皆さん今囲まれている書物、一冊もいりません」と。「単に中国語が話せるようになりたいとおっしゃるならば、今や巷に中国語の講習会がざらにあります」と。「それで足ります。東京外国語大学というのがありますから、これが大学で中国語をやる場所です」とやっちゃったんですね、一席。(笑)で、始まりましたら一人欠けているじゃないですか。僕が事務へ聞きに行きましたら、「中文の入学辞退者が一人おります」(笑)「これは東京外国語大学へ行きました」と。(笑)事務長の話です。私は頼さんの研究室へすつ飛んでいつて謝りました。「来たばかりの訳のわからん奴が勝手なことを言ったから、せっかくの大事な学生さんを一人失った」「勘弁してください」と。で、ご存じの頼さんのお人柄ですから、決して「よくぞ言ってくれた」とは言ってもらえなかったけれど(笑)、かといって「あんなこと言って」ともおっしゃらなかったんです。どういう反応があったか、今覚えていないんですけれどもね。この話までもうちよつと先があつて、おもしろいんです。夏休み近くなつて、今なくなつたんですか、「珈琲館」というのができて間がなかった。あの茗荷谷の駅からこつちへ来る道の左側。そこへ一年の諸君を連れて、珈琲を飲んで、「僕は頼先生に謝ったよ」と。すると一人の方が「先生、それはいいです……それは先生が心配しなくていいんですよ」という。「彼女は私、親しくしていてよく知ってるんですけれども、この大学に来てみたら男の子がいないからやめただけのことです」つて。(笑)私とつきに理解しかねたんですが、だんだん日が経つに従つてわかつてきた。つまり実感ですな、男っ気がないということが。何かいい言葉があるか知りませんが。で、これはしまったと思つたんでしょな。

ここでもう一つ断つておかなければいけないのは、私が「それなら東京外国語大学があります」と言つたことも軽率でした。私の友人がたまたま外国語大にいないんです。行つたこともない。ところがこちらに大学院がで

きまして、博士課程ですかね、それともその前の修士を受けに来た方でしたか、これは卒業論文の提出を求めていますので、本学科に来るための論文を出された。そうしたらその方、「韓非子」の論文です。題目を見て驚きました。我が中国文学科で「韓非子」という方はなかったし、その後もなかったんで……。指導なさる先生もいらっしやると。外国語大学だから外国語だけやっている訳じゃなかったんですね。私の認識不足であったことを、これは外国語大学の方たちにも失礼をしたと、謝らなければならないと、思っております。そういう思いがございます。

一方私は……今日は学会創立三十年を祝う会で私の過去を話してはいけなかもしれませんが、これからのお話の都合でちよつと私の師承記、先生がたから学問を受けてきたその師承記をお話させて頂くと、武内義雄『論語之研究』というのが岩波から出たのが、私が第八高等学校に入つた年でありました。武内さんの「論語」がちょうど十二月でしたから、それより前にたまたま私は一人で、簡野道明さんの「論語」でもつて一通り通読はしておりました。その後また八高二年の時には、今や日本の戦後和歌研究者として知られる樋口芳麻呂君というのが、八高の文甲……文科甲類というのは英語を主体とするクラスで、その文甲一、つまり全くの同級で、その樋口君と一緒に『論語』をもう一回、お互いの家へ行き来して通読しましたから、それで二年間に、一年に一回ずつ『論語』を一通り目を通したことになります。とにかくそうした予備知識を経て武内義雄『論語之研究』に出遇いました。その『論語』の「の」が「ニ」つていう字ですよ、これ」とも読む、「之」ですね。「学んで時に之を習ふ」の「之」ですが、『論語之研究』というものは、『論語』を文献学的に、或いは批判的に整理しながら、「魯論」「古論」「齊論」の三つから成ると言われて、これは知られていることなんです、その関係、それによる重複だとか、或いは思想の偏向、変遷とか、実に見事に解明されておりまして、実は感激してしまつた

んですね。それで私は……武内さんが東北帝国大学にいらつしやつたものですから、八高を終わつたら東北帝大へ行くと言ひ出したんです。その辺の話でこの話と絡まって来ると理解して頂きたいんですが……。で、東北帝大へ行くという私を止めたのは、八高の漢文の教官として二人おられたお一人、近藤康信教授でした。それから京都帝国大学を出られた常盤井賢十。この方は既に京都の東方文化学院京都研究所で『宋本礼記疏校記』と言う見事な著作を出しておられました。そのお二方がいらしたんですが、常盤井さんが応召、兵隊にまた呼ばれてしまつて、あと近藤先生だったんです。その近藤さんが私に「君……東北帝大、結構だけれど、それは大学院になつてから行けばいいよ」と。で、「今、倉石さんが東京帝大で、支那語をまず学んで、それを基礎に支那古典を読むと言う訓練をされているから、まあ東大へ行きたまえ」と言われた。で、そんなもんかなあと、そこは……これ大問題のはずですけど、案外簡単に、素直にですね、受けて東大へ進みました。で、東大へ行つてみると、文学部で試験があつたのは国文学科と心理学科だけで、他はみな定員未満、無試験入学です。支那哲学支那文学科は近藤・田森の二名のみでした。一年先輩に頼さんが、その上に山井さんがおられました。当時ぼやぼやしていたらすぐ兵隊検査ですから、二次試験で満員、満席になるのです。つまり、法学部、経済学部を受けて志を得なかつた方たちが、二次試験で入つてこられて定員を満たすのです。ただまあ愉快なのは、その方たちはあまり研究室に寄りつかないんですね。しかしねえ、演習となると「十三經注疏」を訓読で読むのを、我々研究室に入りしている者とさほど差なく、やりこなしましたよ。倉石先生は、当時京都と東京と掛け持ちの教授ですから、汽車に乗つて、満席ですから鞆に座つて、東京駅に着かれる。それをお迎えして、先生の鞆持つて下宿までお連れして、しばらくおじゃまして帰ってくる。と翌日から厳しい演習。だから倉石先生の演習の用意なんていうのは、一週間かけて準備をしたものです。懐かしい思い出です。

倉石先生のお名前を出してから、もう時間の関係もありましょうから、一枚目のプリントの左半分に移りますと、その左下に、下隅に私の、集英社の「全釈漢文大系」の『戦国策』（中）、その「あとがき」に書いてしまったことをお話しすることで恐縮ですけども、ちょうど私がその集英社の仕事をしている最中であつたと思いますが、大修館書店から倉石先生が『中国古典講話』というものを出版されて、頂戴したんです。そこにおもしろいご提言があるんですね。……そのピンインが出てくるところです。先生は「其の母懼れて、杼を投じ牆を踰へて走る」という文を『戦国策』から引かれ、さらに「日本でむかし出版された『戦国策正解』というテキストがありますが、それには〈其母懼投杼。踰牆而走〉となつていますが」と、句読の違いを指摘されています。これ訓読で読むからこんな馬鹿なところで句読を切る……こんな馬鹿なというようなたしなみの無いことはおっしゃっていますねが……こんな変なところで句読を切るんだと。……先生は「其の母懼れて」で切るのだとおっしゃるのですね。その所ちよつとご覧下さい。で、私不思議だと思ふのは、倉石先生のことだから、その後のことをごたごたおっしゃっているよりは、中国語のリズムとしてそんなことは成り立たん、そんなことはあり得ないとおっしゃればよかったんじゃないかと思うんです。「中国語のリズム」って言うのはよく先生から出た言葉なんで、それを言われるとね、水戸黄門の印籠が出て、「この紋所が目に入らぬか」というやつね、僕なんかも「ははあ」と平伏するほかないんですがね。ここに限ってどうされたのか、なんか意味論で来てね（笑）、その三行の所で。その印籠が出ないんです。それでその切り貼りした後の最後の二行ですけども、そこ読んでみましょう。「日本人はすべて訓読というゴマカシの方法で漢籍をよんできました。よんだつもりで、すましていました。はたして、こういうところで、尻尾を出しているのです」。一番マークしておきたいのは、「訓読というゴマカシの方法で」というところ。これは私先生に叱られる覚悟で言えば、訓読はむしろゴマカシがきかないんじゃないやあござい

ませんか、と言いたい。一字ずつ読んでいきますので、全くゴマカシがきかない。音読はそこへいくと、演習で音読して訳すということをやっていきますと、そこがどうやってその訳になったのかということがわかりにくいところがある。吉川幸次郎先生が京都大学文学部へ講義においでになるようになって間もなくのことですが、何を讀んでいたか、残念ながら覚えがないのですが、担当した学生が何か曖昧な訳を付けていたら、先生がね、いきなり「君、そこ、ちょっと訓読してみたまえ」とおっしゃった。私は思わず先生のお顔を見て、倉石先生があれだけ一生懸命訓読を排除されているのに、訓読してみたまえというのはいかなんと思っただんですけれども、しかし今にしてよくわかります。訓読させればいつべんにばれます、曖昧な読み方をしたことが。(笑)簡単にわかりません。と私は思うんですが、その倉石先生の所謂「ゴマカシの方法」というのは、どうもちょっと納得できない場合があるんじゃないかな、と。さてそこで、この「其の母懼れて、杼を投じ牆を踰へて走る」と。その句読なんです、刊本の景印によると、これは実は手元の「四部叢刊」縮印本で手を抜きました。曾子の母の話ですね。三行目の下あたりから、「昔者 曾子 費に處る、費人に曾子と名族を同じうする者有り、而うして人を殺す。人 曾子の母に告げて曰く、曾參 人を殺すと。曾子の母曰く、吾が子は人を殺さずと。織ること自若たり。有頃つて焉、人又た曰く、曾參 人を殺すと、其の母尚ほ織ること自若たり。頃之て一人、又た之に告げて曰く、曾參 人を殺すと。其の母懼れて杼を投じ、牆を踰へて走る」と。ここですよね。で倉石先生が、訓読するからこんな所で句読を切る、とおっしゃる。ところがこの本は「其の母懼れて杼を投じ」の所に割り注を入れて、「杼」というのは機織り機の横糸を保つものである」と書いてある。それ「杼」の説明ですね。で、問題はその説明内容よりも、注をここに入れていうことに注意して頂きたいんです。普通、一字の音を示すなどの場合は、句読にかかわらずその字の下に入れますが、こういう内容と文字の意味を説く注は必ず句読の入るところに入れ

るのです。ですから、ここにこの注を入れた人が、著者自身であるよりも、ひょっとしたら市井、……町の、貧乏学者だったかもしれません。だけど、少なくとも訓読なんて夢にも知らぬ人が……しかも宋代です……この本は元のものですけれども……訓読なんて夢にも知らない人がここで句読を切った証拠と言えるわけです。だから「懼れて杼を投じ、墻を踰へて走る」と句読するわけですね。これは倉石先生にお伺いしようにも、もう間に合わなかったのが残念だったんですが、中国語のリズムばかりでも……いや中国語のリズムと言うことは簡単には言えないんじゃないかと、こういうところを見ると思います。

実はこのことは集英社の『戦国策』中冊の「あとがき」に書きまして、若干反響もあったんですが、今日お話ししたいのは……二枚目に入りましょう。二枚目は実は三枚目と相並んでいます。二枚目は私、本学を退官の後、ほぼ十年くらいかけて、それまで書いておりました『国朝漢学師承記訳注』、その訳文がほぼ全編に亘ってできておりまして、実は平凡社の「東洋文庫」に入れて頂けるということで原稿用紙まで頂戴してから、思わぬご縁で明治書院が……。『東洋文庫』って言うのはご存じのように、訳文だけで成り立たなきゃならないんですが、今度は明治書院がむしろ原文も入れると、書き下し文もとよりつけると、注もご自由に、と言うありがたい申し出で、上中下三冊に亘る出版を引き受けてくださって、従ってこの二枚目の上が原文、下が書き下し文。そして訳文と……これは二枚目の左に移りますが、こういう様式の整ったもの、つまりそれこそもうごまかしのきかない……どこをどう読んだか、そしてその内容もどこまで著者が理解できてるか、すべてを読者が見通しになる、恐るべき仕事だと思うんですが、そういう形でこの『国朝漢学師承記』……「国朝」というのは清朝のことです、我が朝廷、清朝……、「漢学」というのは漢の時代の学問、またその方法……、「師承」というのが先生から弟子へ受け継がれる学問……、ですからこれは、清朝學術源流ということになりますが、その『漢学師承記』の巻の

八というのは顧炎武と黄宗羲と二人の、清朝考証学の開祖と言われる二人の学者のために江藩がこの記を立てたんです。ところが黄宗羲、顧炎武は、徹底して清朝に降らない、抵抗した人です。しかし学者として清朝の初めに、新しい学問を開いたと言える人なんです。そこで江藩がこの人たちの伝記、ないしは学術資料をここに残すについて清朝に対する憚り、配慮というものがあつて、すべて終わったあとに自ら跋を書くという形にして、「友人が言うには」、それから「私は言った」、この友人と私との問答体を作り上げて、清朝への憚り、遠慮をそこに出示しているんですが、ここで今日見て頂けるのは、原文の八行目あたりで「国朝」という言葉が出ますので、そこに一字……これは原本では擡頭、……擡頭というのはそこで行を換えるんで、「国朝」というのが頭に出るんですが、私はそこに擡頭があることを一字あけて示しています。その一字あいたところをご覧頂くと、「国朝の諸儒」……ああ、そのすぐ前です。その「国朝」、それを目印にしてちよつと前、上のあたりを見て頂きますと、私の読み方は……初めから六行目あたり……「左傳杜注の遺を補ふ」……面白いのはその次なんです。「能為拳世不為之。」と私は切っています。「時謂非豪傑之士耶。」……これが私の句読なんです。実は中国の人たちは一人としてこの句読を取る人はいない。皆さんのお手元にもあると思いますが、まあ『漢学師承記』をお持ちかどうかは無理ですが、「国学基本叢書」というものが句読を切っていますから読むのに楽なんです。その「国学基本叢書」を初めとして、みんな私の句読とは違います。そこで、三枚目、刊本を大きくコピーして頂きました。三枚目をご覧頂くと、これは私の持つ曲阜の刊本なんですが、それを持っていた方は、全編こうして句読を入れて……読みながら句読を切っていかれたんですね。それを朱点……点でなくて大きく丸でされているのでまた面白い、句読がよくわかります。今のところをどうぞ探してみてください。その左……ちようど中程かな……下が空いたところがございます。私の句読と違うのは、「左傳杜注の遺を補ふ」、その後ですね、「能く世を挙げて為さざるの時

……を為す」と読むとわからない。……これは「時に為す」と読んでおきましょう。「能く世を挙げて之を為さざるの時に為す、豪傑の士に非ずと謂ふか」……おわかり頂けたと思いますが、「世の中の誰もがしない時に」となるわけですね。まあ何とかそれで読めるけれども、私は無理じゃないかな、と思うんです。そこで考えたのは、二枚目のプリントに示すように、それ明治書院の本の私の注なんですが、『尚書』、『書経』に「祭祀に黷るる、時れ欽まずと謂ふ」、この「時れ……と謂ふ」その注を入れておきました。その「祭祀に黷るる」というのは、何でもかんでも祭ってしまおうと、それが不謹慎だと、そういう経文があつて、王引之、というのはやはり清朝の大きな学者の一人ですが、『経伝釈詞』と……「経」や「伝」に出てくる虚詞に対して精密な検討を加えたものののですが、「爾雅に曰く、時は是也」と。それから『書』の「堯典」……『書』というのは『書経』のことです。「書の堯典に曰く（黎民於変じ、時れ雍ぐ）」……これによりまして私は「時謂」と、「時れなになにと謂ふ」と読んだわけですが、誰もそんな読み方をなさっている方はありません。……で、今度は三枚目の左の端を見てください。「蘇氏文集の序」、これは歐陽修が蘇氏、蘇舜欽、の文集のために書いた序です。これを見つけてくださったのは、私のこの『国朝漢学師承記訳注』の書評を、『集刊東洋学』に細やかに書いてくださった福岡教育大学の鶴成久章君なんです、その人に実は頼んで唐宋八家の誰か、この「什么什么之時」ですね、「なになに之時」という言いかたを好んで使っていないか探してもらったところが、こんな大きな収穫がありました。「蘇氏文集の序」という、その終わりから三行目くらいから見て頂くと、「是に由りて其の風漸く息む」から……「而うして学者稍古に趨く」か……その次ですな、終わりから二行目の所……「独り子美、世を挙げて為さざるの時に為す」。あとは一句飛んで、「可謂特立之士也」、「特立の士と謂ふ可き也」と。これどうですか。つまり『国朝漢学師承記』の著者江藩がこれを知らなかったはずはないんですね。科挙の試験を受けるんですから、今の我々と違って、こん

なものはほとんどそらんじていたでしょう。私はむしろこれを私の注にも引くとよかったかもしれません。

ところで四枚目は『隸經文』。これは江鄭堂、江藩、の學術論文集なんです。普通の文集よりも厳しく絞って、經学の論文だけを収めたものです。その本のために曾釗という人が序を書いています。曾釗というのは、阮元が建てました広東の学海堂出身の人です。その最後の所……終わりから三行目あたりから「鄭堂先生……（そのアタマ一字空けています）……漢学を善くし、唐宋の文を喜ばず、毎に酒の後、耳熱すれば、自ら言ふ、文に八家の氣無し」と。この「文」とはもちろん私の文、……私の文章には唐宋八家の習氣は全くない、こう書いています。それと同じ内容のこと……四枚目の左端の二行……「文筆考を著して、有韻の者」……これ阮元のことですけれど……ちよつとそこおいといて……「江藩嘗て余に謂ひて曰く、吾が文 他の 人に過ぐる無し、祇だ是れ一毫も八家の氣息を帯びずと」ですね。これはおわかりのように、どちらからも唐宋八家の文をほとんど毛嫌いしているということが読みとれます。その左端に「漢学商兌」と、何とか版心の半分で読める、この『漢学商兌』こそは、『漢学師承記』に反対して、その揚げ足を取って江藩にたてついた人の著述なんです。その人がやつぱりこういうことを書き残している。内容はほとんど同じことでしょう。やつぱり漢学の人が書く、それだけ簡潔な、ばちつと締めた文章ですけれど、「江藩嘗て余に謂ふ、曰く」以下は「吾文無他過人、祇是不帶一毫八家氣息」……これ面白いと思うんですね、ほとんど口語じゃない。もうちよつと直せば口語になるでしょうね。その辺の所、実は私はもう何十年前か前に書いておりますので、お許し下さい。

今日お話ししましたことは、ずいぶん前に書いていることを寄せ集めました。ただ、初めてお話しさせて頂いたのは、ただ今のこの「什么什么之時」という読みかた、それはこれが江鄭堂、江藩、の文章であるかぎり違うであろう。私は「能為拳世不為之、時謂非豪傑之士耶。」と読みたい、読みました、ということ。その「時」

なになにと謂ふ」というのは『尚書』に見える表現であることは先にお話しましたが、その「尚書」というのが、調べてみますと、清朝の初めに閻若璩が、晋の世の梅賾という人が献上した偽古文であることを論証した部分であることはまた面白いですね。「時^{とき}れなになにと謂ふ」という「時謂」ですね。この「時^{とき}れなになにと謂ふ」という言い方は、「偽古文尚書」の部分の二箇所に見えるのですが、偽古文の作者がここはどこから取つてきたものなのか、惠棟の『古文尚書考』に徴してみてもわかりません。ただこれも鶴成君に調査頂いた結果によると、その「偽古文尚書」は、『旧唐書』の二箇所に引かれていて、「柳澤伝」ではそのまま「書に曰く」として引かれており、「礼儀志」では、その内容を紹介している。これも新しく知ったことでございます。それが偽古文の部分であることは、あんまり考慮しなくてもいいんじゃないかと思いますが、ともかく、以上今日までにこの、句読として気がついて、そして私はついに中国のどなたもそこで句読していない句読を取っております。それをお話して、今日の記念講演は「喬木に遷れ」とやりましたが、大津波の威力は、そんな喬木に遷つたくらいではなんにもなりそうでない、すさまじいものである惨状を、端無くもこの三月十一日に見せつけられました。それでも、あるいは、さればこそ、私は最後に、これを言っていいかどうかわかりませんが、「中国語の津波に呑まれるな」、「喋^{ささ}われるな」と。……お叱りを覚悟です。

藤山：ちょっと私の方から発言させて頂けますでしょうか。先生がお書きになった『国朝漢学師承記訳注』、これ、上中下の三冊本なのですが、今日は私重いものですから下冊だけしか持ってこなかったのですが、この中に先生がお書きになった「あとがき」がありまして、それを読んでいるといういろいろなことがよく分かります。一つだけご紹介したいと思います。

先生はこれをお書きになるに当たって、何十年と大変なご苦勞をされてこられたのですけれど、その間、いろいろなところでいろいろな先生或いは同学の方に教えを受けられたということを注で一々丁寧に書いておられます。特に私どもと関係が深いところでは頼先生に関する記述がごございます。近藤先生は学生時代に頼先生や小野沢先生、山井先生たちと『漢学師承記』を読んでいらしたらしいのですが、程なく入隊ということになり、会読のときに生じたいろいろな疑問はそのままになってしまっています。その後復員されてからのことが、先生の「あとがき」にありますので読み上げますと、「頼学兄は互いに疑問のまま入隊し、未解決のままであつた本書（『国朝漢学師承記』の〈七扨の数〉とか〈十暉に終る〉）とかの問題を倉石研究室にまた倉石邸に生活をともしした間、日夜計算してほとんど八、九分どおりの解明にまで導いてくださった」とあります。近藤先生と頼先生は復員後しばらくの間、倉石先生のお宅にいらしたことがあるのですが、その間のことですね。そこで早速この〈七扨の数〉が出てくるところをめくってみますと、注に曆算学上の計算の数式が何頁にも亘って出てきます。「漢書律曆志」や『三統術衍』を傍らに両先生が夜を徹して議論していらした様子が目に浮かぶようです。私は頼先生に「説文会」でご指導を戴きましたが、『説文解字注』の会読中に月の運行や、太陽の黄道に関する記述が出てきますと、頼先生は実に楽しそうに黒板に向かってさらさらと数式をお書きになつていたことなどを思い出します。このご本に、頼先生もそういう風にして関わっていらつしやるということがよく分かつて、嬉しいというか、懐かしいのか、そんな気持ちで致しました。ちよつとそういったご紹介をしたいと思います。

近藤：ありがとうございます。頼さんあつてのですね。



近藤先生のご講演のおかげで先輩諸姉の足跡を知ることができた。更に「嚶鳴」の前に「中国文学研究會報」と題された一冊の存在があったことも知った。会報の題字は網祐次先生ということだが、「嚶鳴」の題字もまた網先生に違いない。「嚶鳴」の今にも崩れそうな表紙を恐る恐る開くと、扉に今回近藤先生のお話に見える「詩経・小雅・伐木」の詩が、謄写版で印刷されている。会報の創刊の辞（網先生）「凡そ、大学の学科が、独立した地歩を得るまでには、少なくとも二十年の歳月を要するのではなからうか。……前途は甚だ遼遠で、現在の会員諸君は、その建設途上に在るわけである。……中国文化の研究は、将来、ますます進歩し発展するものと期待されるが、小にしては、我が研究会、並びに会報の前途も、それにあやかりたいものである。会員諸君は、十分に自重していただきたい」を読んで胸を衝かれた。我々の学会は既に三十年、網先生のいわれる二十年を既に十年も超過したのみならず、会報が初めて発行された昭和三十一年から数えれば、はや半世紀以上の光陰が過ぎ去ったわけだ。我々はその間に何を成し得たのだろうか。「自重」の言葉を改めて嘯みしめ、「喬木に遷れ」という温かな叱咤を力として、「嚶嚶」の声を交わしつつ、共に「喬木」の、より高みを目指していきたい。（平石淑子）

講演資料

伐木丁々（一）
鳥鳴嚶々 鳥鳴く嚶々
出自幽谷 幽き谷より
逕于喬木 喬木に逕る
嚶其鳴矣 嚶々となくその聲は
求其友聲 友呼び誘ふ聲なれや
相彼鳥矣 あゝ彼の鳥を相るにだに
猶求友聲 友を求めて鳴くものを
矧伊人矣 ましてや人と生れ來て
不求友生 友を求めであるべきや
神之聽之 あゝ神これを聽き給ひ
終和且平 和らぎ睦みあらしめ給へ
（一）丁々、ちよーん／＼と木をきる音。

(出文圖書室 あ370087 號)

昭和十八年三月十日 第一刷印刷
三月十五日 第二刷發行 (全 3000 部)

發行所
東京市京橋區京橋三丁目四番地
株式會社 日本評論社
日本出版文化協會員登録第一二二五四〇號
電話 東京 總局 六二九一 四
振替口座 東京 二一六番

目次
目加田 誠
鈴木 利貞
白井 蘇太郎
東京市神田區錦町三丁目十一番地
東京市神田區錦町三丁目九番地
日本出版文化株式會社

定價 壹圓八拾錢

(青木兄弟製本)

(精興社印刷 東京41)

〔二〕秦策二「曾子の母」の説話(其の三上冊二二六ページ)の句読の問題を巡って

説話は、曾子の母が機織りをしているところへ、「あなたの息子が人殺しをした」と告げに来る人が、三人に及ぶと、「其の母懼れて杆を投じ、牆を踰えて走れり」というものである。今、中国語の学習に励む人の目に触れやすい書物かと思うが、倉石武四郎『中国古典講義』(昭和四十九年 大修館)に「戦国策」としてこの文を挙げ、

其母懼、投杆踰牆而走。

Qí mǔ jù, tóu zhù yú qiáng ér zǒu.

と句読し、次のとおり講ぜられる。その本はすべて横書きに組まれているが、

日本でもかし出版された『戦国策正解』というテキストがありますが、それには、「其母懼投杆。踰牆而走」となっていますが、わたしははじめにあげましたように、其母懼でちょっと切ってから投杆踰牆而走というふうにしておきました。

と言われ、そして、

というのは懼というのは心の問題です。ハッとして、そのあとは無意識の動作ですから、それはおなじ比率で投杆と踰牆がならべてあり、それがやがて走に通ずる、ということが、この文をかけた人の気分であり、これをよむには、それに応じたよみかたがなくしてはなりません。

と、丁寧な説明が続く。ここまでのところでも、先生が中国語のリズムの問題として説いておられないのに疑問を感じるが、さらにこれに続けて次のようにおっしゃっている。

『正解』の作者にかぎらず、ながいあいだ、日本人はすべて訓読というゴマカンの方法で漢籍(中国古典)をよんできました、よんだつもりで、すましていました。はたして、こういうところで、尻尾を出しているのです。

あとがき

戰 國 策 卷二
 曾子之母
 曾子之母織布於室。有客過之。曰：「曾子何如？」母曰：「其母懼投杆。踰牆而走。」

全訳漢文大系 第二十卷

戰 國 策 中

1977

昭和五十二年七月十日 初版印刷
 昭和五十二年七月十日 初版発行

著 者 近 藤 光 男

編 集 全訳漢文大系刊行会

発行者 堀 内 末 男

発行者 株式会社 集英社

東京市千代田区千代田二丁目五番一
 電話 〇三三〇六二七
 東京市千代田区千代田二丁目五番一
 電話 〇三三〇六二七

客曰、二君以環異之質、負經世之才、思見用於當世、垂勳名於來葉、讀書論道、重在大端、疎於末節、豈若抱殘守缺之俗儒、尋章摘句之世士也哉。然黃氏闢圖書之謬、知尙書古文之僞、顧氏審古韻之微、補左傳杜注之遺、能爲舉世不爲之時、謂非豪傑之士耶。國朝諸儒、究六經奧旨、與兩漢同風、二君實啓之、菜瓜祭飲食之人、芹藻釋瞽宗之奠、乃木本水源之意也。況若瓊四書釋地、曲護紫陽、黜明洪範正論、直譏劉向、於此則從寬假之條、於彼則嚴踰閑之辨、非有心軒輊者乎。予曰、甲申乙酉之變、二君策名於波浪礪灘之上、竄身於榛莽窮谷之中、不順天命、強挽人心、發蛙蛆之怒、奮螳螂之臂、以烏合之衆、當王者之師、未有不敗

客曰く、「二君は環異の質を以て、經世の才を負ひ、當世に用ひ見れ、勳名を來葉に垂れんことを思ひ、書を讀み道を論じ、重んずるは大端に在り、末節を疎んず。豈に殘を抱き缺を守るの俗儒、章を尋ね句を摘むの世士の若く也らん哉。然れども黃氏は圖書の謬を闢き、尙書古文の僞を知る。顧氏は古韻の微を審かにし、左傳杜注の遺を補ふ。能く世を舉げて之を爲さざるを爲す。時れ豪傑の士に非ずと謂はん耶。國朝の諸儒、六經の奥旨を究め、兩漢と風を同じうするは、二君實に之を啓く。菜瓜もて飲食の人を祭り、芹藻もて瞽宗の奠に釋くは、乃ち木本水源の意也。況んや若瓊の四書釋地は、曲げて紫陽を護り、黜明の洪範正論は、直に劉向を譏るをや。此に於ては則ち寬假の條に従ひ、彼に於ては則ち踰閑の辨を嚴にするは、心有つて軒輊する者に非ず乎」と。予曰く、「甲申乙酉の變に、二君は名を波浪礪灘の上に策し、身を榛莽窮谷の中に竄し、天命に順はず、強に人心を挽いて、蛙蛆の怒を發し、螳螂の臂を奮ふ。烏合の衆を以て、王者の師に當る、未だ敗れざる者有らず矣。夫の故土焦原、橫流毒浪の後に遠んで、尙ほ自ら東林の黨人を負ひ、猶ほ西臺の慟哭に效ふ。前朝の遺老なりと雖も、實は周室の頑民なり。當に名は頑胥の條に編すべく、豈に能く儒

者矣。逮夫故土焦原、橫流毒浪之後、尙自負東林之黨人、猶效西臺之慟哭。雖前朝之遺老、實周室之頑民、當名編黜胥之條、豈能入儒林之傳哉。

林の傳に入れん哉」と。

(10)時謂：尚書說命中に「祭祀に黜るる、時れ歛ますと謂ふ」。王引之の經伝釈詞に、「爾雅に曰く、(時は、是(これ)也)と。書の堯典に曰く、(黎民於變じ、時れ雍ぐ)と。

友人が言うには、

〔黄・顧の〕二君は人並みはずれた素質をもって、經世濟民の才能を自負し、当世に用いられて功名を後世に垂れようと思ひ、書を読み道を論じるには大端を重んじ末節を疎んじました。残缺した書物をかかえこんでありがたがる俗儒や、章句をつまみ食ひしてよろこぶ俗人とは、似ても似つかないではありませんか。しかも一方、黄氏は河図洛書のでたらめをあげき、「古文尚書」のいつわりに気付きしました。顧氏は古韻の微細な分部を明らかにし、『左伝』杜注の遺佚を補いました。かように、當時の人々の誰もが、しなかったことができた人なのです。こういう人たちを「豪傑の士」でないとおっしゃるのですか。わが朝の學者たちが六經の奥義を究めるさまは、兩漢と學風を同じくしていますのは、まったくこの二君が開いたのです。菜や瓜を供えて始めて飲食を教えた人を祭り、芹や藻を供えて学宮に先師を祭りますが、それは根あつての樹、水源あつての川、という心ばえなのです。まして閻若璩の『四書釈地』は無理して紫陽(朱子)の説を擁護し、胡渭の『洪範正論』は遠慮なく劉向を讃めているのでは、なほのことです。こちらは大目に見て許しておいて、あちらについては舌を越えたことを厳しく辨じだてなさるのは、故意に優劣をつけたいのではないではありませんか。

と。私は言った、

甲申・乙酉の年の国変に、〔黄・顧〕二君は海濤さかまく浜辺に巨下たるの名を留め、草木生い茂る窮谷にその身を潜め、天命に順わず民心をあながちに引きつけて、蛙蛙が腹をふくらませて怒ったような怒りを発し、螻蛄が臂をふりあげて車にたちむかうような奮戦をしました。鳥合の衆を率いて王者の軍にはむかつたのでして、こ

國朝漢學師承記

論經評史亦不苟同也

節甫曰。記成之後。客有問於予曰。有明一代。囿於性理。汨於制義。無一人知讀古經注疏者。自黎洲起而振其頽波。亭林繼之。於是承學之士。知習古經義矣。所以閭百詩胡朏明諸君子。皆推挹南雷崑山。今子不爲之傳。豈非數典而忘其祖歟。予曰。黎洲乃蕺山之學。矯良知之弊。以實踐爲主。亭林乃文清之裔。辨陸王之非。以朱子爲宗。故兩家之學。皆深入宋儒之室。但以漢學爲不可廢耳。多騎牆之見。依違之言。豈真知灼見者哉。客曰。二君以環異之質。負經世之才。思見用於當世。垂勲名於來葉。讀書論道。重在大端。疎於末節。豈若抱殘守缺之俗儒。尋章摘句之世士也哉。然黃氏闢圖書之謬。知

尙書古文之僞。顧氏審古韻之微。補左傳杜注之遺。能爲舉世不爲之時。謂非豪傑之士耶。

國朝諸儒。究六經奧旨。與兩漢同風。二君實啟之。菜瓜祭飲食之人。芹藻釋瞽宗之奠。乃本本水源之意也。況若璩四書釋地。曲護紫陽。臚明洪範正論。直譏劉向。於此則從寬假之條。於彼則嚴踰閑之辨。非有心軒輊者乎。予曰。甲申乙酉之變。二君策名於波浪礪灘之上。竄身於榛莽窮谷之中。不順天命。強挽人心。發蛙鼃之怒。

蘇氏文集序

予友蘇子美之亡。後四年始得其平生文章遺稿。於太子太傅杜公之家。而集錄之以爲十卷。第一小段。敝集遺稿。子美杜氏壻也。遂以其

其後天子忠時文之弊。下詔書。

諷勉學者。以近古。由是其風漸息。而學者稍趨於古焉。獨子美爲於舉世不爲之時。其始終自守。不牽世俗趨舍。可謂特立之士也。第二小段。敝子美之特立。○以上第三大段。敝子美特立于時流是其可伸子後世之實。子美官至大理評事。集賢

隸經文目錄

第一卷

議

第二卷

辯論解

第三卷

說

第四卷

釋雜文

文莫盛於漢漢書藝文志無文家何哉說文解字文
畫也象交形然則物類中一彼一此同異相錯而成

序目

章皆謂之文故六藝諸子文也箋注傳疏亦文也而
後世漸尙詞章推唐宋八家爲文宗至於核證典禮
辨訂經傳則皆外之曰攷據家若不足以語文者嗚
呼空騁議論衆口一談卽多至百卷究何補哉

國朝崇尚實學於是朱竹垞錢辛楣數先生以攷據

之文雄然應酬之作多有釗嘗惜其不能刪汰獨存
問荅經史題跋金石諸篇 甘泉江鄭堂先生今之
宿儒也博學無所不通著作富甚一日出隸經文示
釗命敘且曰此從諸文中刪存者苟非說經皆不錄
釗受而讀之眞能於前人紛糾同異之說參互考訂
發所未發謂之六菴傳注可謂之自成一子亦可爰
爲編成四卷以授梓人并以鄙見附目錄後使爲文
者知所從事無徒騁虛詞焉 鄭堂先生善漢學不
喜唐宋文每酒後耳熱自言文無八家氣云道光元
年八月二十六日南海曾釗謹敘

著文筆考以有韻者爲文其情亦如此江藩嘗謂余曰吾
文無他過人祇是不帶一毫八家氣息又凌廷堪集中亦